ノルウェーのビョルナ・ヴァルシュタとハンネ・スタッフがドリームプロジェクトの招きで来日。ビョルナは１９９９年の世界選手権クラシック優勝、またハンネは、１９９７年ノルウェーでのクラシック優勝者である。二人とも、昨年４月に開催されたワールドカップのおりにも来日している。二人は、１２月の２９日に到着、その脚で富士で開かれていたジュニア合宿（トータス主催）で講演。翌３０日には、ワールドチャンピオンオープン（トータス主催）に参加し、オフシーズンにもかかわらず素晴らしい走りを披露。
オーマガジンでは、３０日に開催された大会に彼らを訪ね、インタビューをおこなった。

世界チャンピオンが語る オリエンテーリングに託した夢

ハンネ◆両親の影響です。私の家族にとっては伝統的なスポーツだったの。祖父もオリエンティアで、彼は１９３０年代にノルウェーの代表チームに在籍していました。
ビョルナ◆僕の家はオリエンテーリング家族ではなかったのですが、ハイキングをするなど、森の中にいつもいるような家族でした。小さい頃はいろいろなスポーツをやっていました。クロスカントリースキー、ランニング、バイアスロン。学校の同級生とよくやっていたのです。
実際、オリエンテーリングの初心者コースに行きましょうといったのは、学校の先生だったと思います。それで、行ってみて、そこから全てが始まったのです。はじめの頃はやっぱり、そういう仲間と一緒にやるという雰囲気に惹かれました。
競技には同級生とよく行き、週に４回も競技をしていました。大会が、火曜日、木曜日、そして週末。本当に多くの大会に行っていました。とても、楽しかったですね。
まあ、ハンネのように家族でやって

いるのと、僕みたいなパターン、どちらも、オリエンテーリングを始める典型的なパターンといえます。私のいたトロンハイムなんかは、始めはオリエンテーリングをする人なんて、独りもいませんでしたが、少したったら、本当に大勢になっていました。とてもエネルギーを持った人のおかげだったのですが。

――

ハンネ◆私は競い合うのが好きだったの。冬にはクロスカントリースキーをやって、夏にはオリエンテーリングをやって。似たようなスポーツね。本当に競い合うのが好きだったみたい。
ビョルナ◆始めは友人のみんながやっていたから。まあ、周囲に合わせるという感じです。はじめの頃は、楽しいからやっていました。ほんの１０歳だったし。始めの２年間ぐらいかな、そんな感じで。森で自分自身の道を探して行くというチャレンジがとても好きだったのです。チームスポーツもやろうとはしたのですが、すぐ、個人競技の方が向いていると気がつきました。

――

ハンネ◆競技中は孤独ね。でも、トップレベルでやるためには、チームスポーツというふうに、考えるべきでしょう。そのようにして、周囲の人達を使ってもっと向上していくの。そうすると、その過程ではあまり孤独じゃないでしょ。でも競技中は、やっぱり、自分独りね。

――

ビョルナ◆競技中は、とにかく今何をしなくてはいけないかを考えている。でも、そこに行くまで，やっぱりチームであることはとても大事。物理的に一緒にトレーニングをするだけではなく､チームスピリットが、特に長期に渡り何年もトレーニングする上でとても重要だ。もちろん、競技中、他人が自分を助けることはできないから、自分自身の勝負なんだけどね。

――

ハンネ◆とても良いテレインだと思うわ。とてもテクニカルだし、体力的な要求も高いし。
ビョルナ◆こういう溶岩が流れているテレインと言うのは日本にそう多くはないと聞いているけど。でも、こういうテレインに対応して走れるのなら、北欧のテレインでも充分走れるようになれるよ。

――

ビョルナ◆とてもいいんじゃないんか。ほら今日の（ショートタイプで走った）成績を見ても彼らは僕よりそんなに遅れていない。多分他の国で走るときにもっと自信が必要なんだと思う。そうすれば、決勝にも残れるようになるんじゃないかな。
ハンネ◆トレーニングが不足しているんじゃないかしら。たとえば、もっと職場の上司や、大学の教授に話しをして、このゴールのために、もう少し時間が必要なんだ、と話す必要があるんじゃない。そうじゃないと、充分な経験、十分なトレーニングはとてもできないでしょう。もちろん、ノルウェーでは、例えばパートタイムの仕事をすることなどに対し、社会的に受け入れられやすいから、もう少し楽だけど。

――*そういった時間の使いかたの違いが、日本のエリートとノルウェーのエリートとの大きな差ということですか？*

ビョルナ◆　そう。決勝に残ろうとしている人が何十人もいて、みんながそのようにやっている。彼らに勝ちたいなら、少なくとも、彼らと同じぐらいのことはしなくてはいけないでしょう。そして、このステップを取ることは、本当に望めば可能なんだ。

――*でも、日本では、北欧のエリートがオリエンテーリングで給料をもらっている、と考えているようですね。*

ビョルナ◆今はそうかもしれないけど、僕がジュニアで、誰も僕がオリエンテーリングで活躍できるか分からなかった頃は、スポンサーなんていなかったし、代表チームからお金なんか出なかった。だから、学校に行くのも借金をしなければいけなかったんだ。それで、力を発揮できるまで何年もかかったしね。ほんの過去数年だよ、スポンサーからお金をもらえるようになったのは。そこまでは、お金じゃなくて、自分が信じているかどうかだった。とにかく、まず、結果を出す。それからじゃないと、お金はもらえない。
ハンネ◆現在でもほんの四，五人しかオリエンテーリングで稼いでいる人はいない。それも、他の競技と比べたらとても少ないのよ。やっぱり、オリエンテーリングではあまりお金はもらえない。また、フルタイムの仕事をしていたら、ノルウェーではトップレベルで競技はできないんじゃないかしら。

――

ビョルナ◆それは、ノルウェーでも一緒。彼らは、人生をまで整理できず、トップのレベルにあと一歩でなれない。でも本当に努力する人。彼らは「じゃあ、今年は７０％の仕事しかしない」と決める。そして、こういう競技者が伸びて行くんだ。そして、伸びることができれば、スポンサーもつくかもしれない。
みな、簡単にお金をいっぱい稼いでいると思うかもしれない。でも、そんなことはないんだ､全て､《頭を指して》ここにあるんだ。

――

ビョルナ◆僕は勉強をしたいなと考

えています。あと、スポーツに何かしらの形で貢献したい。もちろん、そのうち、家族を持ちたいしね。もうちょっと、普通の人生をというのかな。
ハンネ◆そう、普通で退屈な！
ビョルナ◆オリエンテーリングをトップレベルでやっていると本当にいっぱい旅行する。今年だけでも、１６０の競技に参加しているんじゃないかな。
ハンネ◆私も教育を受けたいわ。スポーツを勉強したり。それで、スポーツに何かしら関係ある仕事をするの。オリエンテーリング。もしくは、似たようなもの。

ハンネ◆他のスポーツで競技していたわ！
ビョルナ◆難しいね。でも、何かしらスポーツをやっていたと思う。あと、若い頃は山にハンティングや、釣りにいくのがとても好きだったけど、ここ１０年間はそんな時間が全くない。もしかしたら、そういうことをしていたんじゃないかな。もちろん、将来にしたいことでもあるし。
ハンネ◆でもオリエンテーリングがなかったら、とても多くのことを経験することができなかったわ。とても違った人生になっていたと思う。でも、どのように違うかは、答えられないけど。
ビョルナ◆オリエンテーリングを３６カ国でやっているけど、もし他のスポーツをやっていたら、その３６カ国で行ったようなところに行くことは無かったんじゃないかな。競技そのもの以外得るものはとても大きいんだ。もしオリエンテーリングがなかったら、とはあまり想像できないけど、今の生活が本当にきだし。

ビョルナ◆一つあったんだけど、もうやってしまったんだ。富士山を登ることだったんだけど。冬に富士山を登って見ようか、とても危険って聞いているけど。
ハンネ◆私はそんな危険なことはしないわ（笑）。
日本に来るときはいつもオリエンテーリングのためで、それ以外の時間で行動するんだけど、次何があるかプログラムがないからわからないのよ。「あそこ行って、ここ行って」って言われて。面倒見てもらっている人達に任せっきりよ。
ビョルナ◆でも今回期待しているのは、日本のほかの地域を見られること。今までは東京と、静岡周辺しか見ていないし。もっと日本のほかのところを見てみたいね。

世界チャンピオンへのヴィジョン

彼らがオリエンテーリングをはじめたのは１０歳の時、その後ハンネは１５歳くらいの時から、競技的なオリエンテーリングをするようになった。一方のビョルナは１７歳で競技的なオリエンテーリングを始め，１９歳のときには、ジュニアのナショナルチームに入った。シニアで世界選手権に出場したのは、４年後の１９９１年（チェコ）であった。
　そのときのレースをビョルナはこう振り返る
「クラシックでは確か１５位だったと思います。タフなコースでした。とにかく２時間近くかかって帰ってきて、コーチのアイシュタイン・ヴェルチンが,『こんなタイムじゃ話にならん。全然下の方だ」といいました。私は、世界選手権が始めてだったので、どんなものかも分かりませんでしたが、実際には後からゴールする選手もみんな遅くて、「なんだ、これじゃあまずまずじゃないかと思いましたね。」
１９９７年，二人は母国ノルウェーでの世界選手権を迎える。二人とも非常に期待された選手であった。二人の写真を使った世界選手権のポスターがいたるところに張られていた。このときのことをハンネはこう振り返る。
「開催地の小さい街のいたるところに自分の写真がありました。だから、それを見て「自分はスターなんだ」なんて思わないようにしました。だって、いい結果が出なかったら、すぐにスターなんて地に墜ちてしまいますから。幸いなことに、ハンネ・サンスタットが選考会では調子がよくて、注目されていました。私は８位。だから、あまり周囲の期待を気にせずレースをすることができました。」
この大会で、期待はずれの成績だったビョルナは一念発起する。そのときのことを、彼はこう語った。
「この世界選手権の翌日、私は次の世界選手権へのヴィジョンを作りました。それは新聞記事のようなものです。１９９９年、世界選手権のレースの翌日「ビョルナが,改心のレースで優勝」そういう記事がノルウェーの新聞に出るところをイメージしたのです。それをプリントアウトして、部屋に張っておきました。」　その通り、彼は１９９９年の世界選手権で、これまでの世界選手権史上に残る会心のレースで優勝を飾る。まさにヴィジョンを形にしたのだ。
　その後も二人は、世界のトップ選手として君臨している。世界チャンピオンになるためには、生活の何かを変える必要がある、と二人は言う。「だから、私は新しい映画にだって、パーティーにだってそんなにたくさんいかない。ビョルナも連れてってくれないから。確かに私の生活には『できないこと』がある。でも他の人だって、私がしていること、世界を旅行すること、トップに立つこと、そのすべてができるわけじゃない。」
こうして日本に招かれることも、彼らにとっては世界チャンピオンになる努力がもたらしてくれた楽しみの一つなのだろう。